

鈴木 優人

interview

「バロック音楽」は根強いファンがありますが、圧倒的に不動のカリスマ性があるのは、やはりJ.S.バッハです。バッハは現在でもいろんなジャンル、たとえばジャズのアーティストもバッハをカバーしたり、アレンジしたり、影響を受けています。そしてその旋律は今もって新しさを感じます。鈴木さんにとって「バロック」「バッハ」とはどういった存在で、どのように魅力を感じられていますか？

やっぱり普遍的なところでですね。チェンバロやピアノなど、どんな楽器で演奏しても、アレンジしても、強い力と包容力があります。今回くらで演奏する「音楽の捧げもの」という曲は、対位法が際立った作品です。対位法とはポリフォニーの技術、つまり複数の旋律を組み合わせていく技法のことで、ルネサンスの時代からバロック時代にかけて多くの作曲家が腕を磨きました。バッハはこのポリフォニーの最高峰を築いた作曲家であり、この「音楽の捧げもの」は、その随一の楽曲です。こういった磨き抜かれた技法を耳にすることで、我々に生きるヒントといましようか、それぞれのパートの旋律が等しく平等に歌われることが可能であると思わせてくれ、バッハを演奏していると自然にそういう形で音楽に向き合うことになりま。というわけで、バッハの音楽には全員が輝く、全員が曲の成り立ちに奉仕する、そういう姿勢が生まれます。BCJ(バッハ・コレギウム・ジャパン)もそういった姿勢で取り組んできた楽団です。このようなバッハの音楽を今回、初めて東広島市で演奏できることには特別な喜びがありますね。

みんなが輝く音楽ということで、やはりバッハは唯一無二の音楽という感じは否めません。

そうなんです。バッハは、ヴィオラ奏者にさえ美しいメロディを与えたという(笑)(注:ヴィオラ・ジョークです)。

プロフィール/鈴木 優人 Masato Suzuki
 バッハ・コレギウム・ジャパン(BCJ) 首席指揮者、読売日本交響楽団指揮者、アンサンブル・ジュネシス音楽監督。国内外のオーケストラと共演するほか、鈴木優人プロデュース・BCJオペラシリーズにてバロックオペラ上演にも定期的に取組んでいる。「古楽の楽しみ」、「題名のない音楽会」などに出演。調布国際音楽祭エグゼクティブ・プロデューサー。九州大学客員教授。

るところがあるんですよ。今回でいうとチェロやヴィオローネやチェンバロですけれども、ベースラインを担当する通奏低音が全体のパルスなど全てを支配して、低音から音楽が動いていく感じもバロック音楽のとても楽しいところですね。もちろん、ヴァイオリン、オーボエ、フルートなど旋律楽器がリードしていくメロディの美しい楽しさもあるんですけど、ロック、またポップスのように、ベースがあって、ハーモニーがあって初めてメロディがあるという構造は、実は後のロマン派の音楽よりもむしろ、ロックやポップスのほうが似ているっていいかもしれません。

あ、それは面白いですね。ロックのプログレ(プログレッシブロック)なんかはそんな感じがします。

そうですね。バンドにおけるベースとキーボード、その二つが通奏低音ですね。チェロとヴィオローネがベースを弾いていて、チェンバロはキーボードを弾いているんですよ。ギターがヴィオラで、ヴァイオリンがボーカルといった感じでしょか。

チェンバロという楽器もなかなか触れることがないものですが、音の感じが私には電子音っぽく感じられて、いま鈴木さんがおっしゃったロックの感じにもつながる気がしました。

そうですね。チェンバロは打楽器的な楽器なんですよ。仕組みとしては、弦をはじいているんです。初めて聴いた方からは「すごく優雅な音でした」と感想を言われることも多いのですが、やってることはそれこそ、さっきおっしゃったプログレ的なところがあって、結構ワイルドなことをしています。今回くらに持ち込むチェンバロは結構音量の大きい楽器です。パーンと出る音の発音の速さがピアノよりも速いので、はっきりとビートが出ます。かちっ

クリエイティブ・パートナー、関西フィルハーモニー管弦楽団首席客演指揮者、アンサンブル・ジュネシス音楽監督。国内外のオーケストラと共演するほか、鈴木優人プロデュース・BCJオペラシリーズにてバロックオペラ上演にも定期的に取組んでいる。「古楽の楽しみ」、「題名のない音楽会」などに出演。調布国際音楽祭エグゼクティブ・プロデューサー。九州大学客員教授。

楽器がどのような楽器なのか、というところも興味が尽きないところです。

今後、さらに注目が増えてきそうにお見受けいたしました。さて、今回のバロック企画ではどういった演奏になりますか?聴きどころなどあればお聞かせください。

今回はBCJが誇るソリストたちが集まった小編成での演奏です。個性的なキャラクターが感じられ、一人ひとりが輝いた演奏になると思います。例えるならば、日本代表のサッカー選手のように競技し、チームを組んでいるといった感じです。当日ステージでは、エピソード・トークも挟みながら、メンバー、一人ひとりの顔が伝わるようにしたいですね。イタリア由来の様式である協奏曲が2曲、そしてまたヴァイオリンやオーボエのためのソナタなどを通して、現代の楽器とは違ったバロック時代のオーボエやヴァイオリンの音色を聴いていただけます。驚くほど色彩豊かなオリジナル楽器の音色を楽しんでいただけたらと思います。

BCJメンバー、それぞれのエピソードをご紹介ください。

今回、フラウト・トラヴェルソ奏者の鶴田洋子は私の妻でもあります。先日、ヨーロッパツアーでも演奏しましたが、改めて素晴らしい奏者だなと思いましたよ。それからオーボエの三宮さんは、通称「さんちゃん」と呼ばれています。BCJのムードメーカーで、ツアー中でもさんちゃん部屋に行きますと常に誰かが杯を手に音楽を語らっている、ホスピタリティの塊のような人です。

西条は酒処ですが・・・

あ〜こりゃたいへんだ(笑) いや〜飲めたらいいですね。当日はステージでそのあたりの話もしましょうか(笑)

そして弦楽器奏者もご紹介しましょう。荒木優子さん、堀内由紀さんの二人のヴァイオリニストは、とても華のある奏者ですね。荒木さんは、独奏でソナタも演奏してくるのでとても楽しみです。そしてヴィオラの原田陽さんは、ヴァイオリンも素晴らしい奏者で、BCJイチの高身長奏者です。優しい人なので、さっきのヴィオラ・ジョークも怒らないでくれると思います。チェロの上村文乃さんは、モダン・チェロのソリストとしても活躍していて、スイスのバーゼルで学んだ方です。ヴィオローネを演奏する今野京さんも、BCJの音楽をいつも低音から支えてくれている頼れる存在です。

最後に、東広島市でコンサートを楽しみをしています、ファンの方々にもメッセージをお願いします。

東広島市には人生で初めて行きます! 音響がとてもよい、と伺っているくら大ホールは、バッハの音楽にはぴったり。とても楽しみです。意外にエキセントリックなところがあったり、意外にJAZZのようなノリがあたりと、変化のあるバッハの音楽をぜひ楽しみにいらしてください。

ありがとうございました。公演を楽しみにしております!



鈴木優人バロック企画 with バッハ・コレギウム・ジャパン 「バッハ家の音楽室へようこそ」

12/15(日) 15:00開演(14:15開場) 大ホール
 一般:SS席6,000円 S席5,500円 A席4,500円
 学生(大学生以下):全席2,000円
 [くらんフーズ:S席5,000円 A席4,000円]
 ※SS席および学生席は会員割引なし
 未就学児入場不可



バッハは演奏するたび、 毎回変わっていくし、変わってよい。 諸行無常の世界なんです。



©Marco Borggreve

バッハはストイックなものも感じられますが、

そういう印象を持っている方は多いです。ただし、バッハを聴くのに全てストイックである必要はない。協奏曲やコンチェルトでは本当に華やかに聴きやすい楽曲もありますよ。それと、たぶん皆さんピアノのレッスンで苦しんだ記憶が、バッハをそういった難解に感じていることもありますよね。

たしかに左手が難しいかと・・・

なぜ左手が難しいかというと、左手も右手と同じように輝かないといけないから。すべてが美しい旋律であるため、左手のほうも手を抜くわけにはいかない、という。

納得です(笑)

とても即興的なところも魅力がありますね。

そうですね。構造として美しく、緻密な寄木細工のような、工芸品のような楽譜なんですけれども、その中で自由に遊べる世界がありますね。とても動きのある音楽だと思っています。

僕がなんでバッハが好きかっていうと、演奏の一筆一筆、筆を下ろすたび、まるで万華鏡のように変化していくから。演奏するたびに毎回変わっていくし、変わっていい。諸行無常の世界なんです。前やった通りにびったりコピーしてやろうって世界とは全然違って、毎回インスピレーションがある。そういうところが好きなんです。バロック音楽が好きな人は、そのようにして奏者が自由に音楽を楽しんでいるのを眺めるのがきっと好きなんじゃないかな。それと、「バロック」と「ロック」、単語が似ていますが、実は音楽の作りがロックにも似てい

と弾くこともできますし、バラして弾くと柔らかい表現にもなります。アルペジオの度合いでいかようにもニュアンスをコントロールできるというのがとてもおもしろいんですよ。そのあたりがとても即興的な楽器です。

ピアノは音量の変化が出せるけど、チェンバロは強さが変わらない、と習ってしまった方がいます。確かに一音一音の原理はそれに近いですが、ピアノという強弱とはまた違ったやり方でダイナミズムを作り出しているのがチェンバロです。制限を利用して、むしろ多様に音が作れるといえます。

JAZZのインプロ(即興)が好きな人は、バッハにインスパイアされることも多いでしょう。

私もJAZZが好きです。きっとJAZZの方もバッハが好きははず。JAZZ界の巨匠、山下洋輔さんも「バッハはジャズだ!」と仰っていましたよ。

バロックという音楽に対して今後、鈴木さんはどんな変化球を投げっていくのか、どのように活動を広げていかれるのでしょうか?

私の活動の拠点であるBCJにおいては二つの方向性があります。

バロック時代には数限りない作曲家がいて、知られざる作品も多々あります。そういった楽曲に積極的に取り組みんでいくことがその一つですね。バッハよりもさらに100年古い、例えばモンテヴェルディの作品などもいくつか皆さんに共有できたらと思っています。また最近では、バロック音楽のみならず、ベートーヴェンなどのクラシックや、メンデルスゾーン、ブラームスといったところまで活動は広がっています。19世紀のオリジナル